

昭和56年~~12~~<sup>11</sup>月20日発行  
「かいろす」第19号別刷  
Kairos 19 (1981)

「ニーベルンゲンの歌」における  
リュエデゲール悲劇の特質

石川 栄 作

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 1981

# 「ニーベルンゲンの歌」における

## リュエデゲール悲劇の特質

石川 栄 作

### 本稿の内容

13世紀初頭のニーベルンゲン詩人の自由な創作人物リュエデゲールは、作品全体の組立に重要な役割を演じている人物であり、この人物の理解は「ニーベルンゲンの歌」を解く重要な鍵と言える。本稿ではこのリュエデゲールの苦悩と決心とをめぐって、当時のハルトマンの作品「イーヴァイン」と比較しながら、その悲劇の特質を明らかにしてゆく。

### Kurze Vorstellung des Inhalts

Rüdegêr, eine Erfindung des letzten Dichters, spielt im ganzen *Nibelungenlied* eine wichtige Rolle. Das Verständnis dieser Gestalt ist also ein wichtiger Schlüssel zur Nibelungeninterpretation. Wir beobachten hier Rüdegêrs Qual und Entscheidung im Vergleich mit Hartmanns *Iwein*, um die Eigenschaft seiner Tragödie aufzuhehlen.

### 1. はじめに

12世紀末から13世紀初期に至る時代はドイツ文学史上最初の興隆期と言われる。ハルトマン・フォン・アウエ、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ及びゴットフリート・フォン・シュトラースブルクはこの時期の三大叙事詩人である。彼らの手に成る諸作品は一般に「宮廷叙事詩」(Höfisches Epos)と呼ばれているが、それは、そこにおいて当時の宮廷的騎士道の世界観が形成されているということに由来するものである<sup>1)</sup>。一方、この時期には古代ゲルマン英雄伝説を素材とした「ニーベルンゲンの歌」も成立しているが、これは「宮廷叙事詩」に対して「英雄叙事詩」(Heldenepos)と呼ばれていることは周知の通りである。しかし、厳密な意味においてこの区別は必ずしも正確ではない。この所謂英雄叙事詩もまた宮廷的特徴を

有しているからである。しかし、この英雄叙事詩の本質は、当時のほかの宮廷叙事詩とはかなり異なっており、そのことはすでに拙稿<sup>2)</sup>で述べてきたが、それは要するに、「ニーベルンゲンの歌」の本質には、成立当時の宮廷文学からの強い影響もさることながら、まず第一に取り扱われた古代ゲルマンの素材に特有な精神が忠実に残されているということであった。換言すれば、その素材の選択が作品の本質に及ぼした影響は非常に大きかったと言えよう。しかし、フン族とブルゴント族への忠誠の板挟みとなって懊悩するリュエデゲールという人物を考察するとき、この叙事詩における潑刺たるゲルマン的精神の展開は偉大な詩人の創作力に依るところ多大であったことも見逃せない。なぜなら、その人物は、1160年頃のブルゴント族滅亡の物語にもその登場が推察されるにせよ、その悲劇的な状況と精神的苦悩に関しては大部分13世紀初頭のニーベルンゲン詩人の自由な創作であると見なされる<sup>3)</sup>からである。しかもその人物は叙事詩全体の骨組に重要な役割を演じている人物であり、主人公クリエムヒルトと並んで、この人物の理解がニーベルンゲン解釈の重要な鍵であると言っても過言ではあるまい。本稿ではこのリュエデゲールの苦悩と決心に関する諸問題をめぐって、当時のアルトゥース宮廷叙事詩の一つハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」と比較しながら、その悲劇の特質を考察してゆきたい。

## 2. 宮廷的騎士リュエデゲール

ベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールがこの叙事詩でまず紹介されるのは「気高く品位ある騎士」(1164, 1; 1180, 4; 1198, 1)としてである。エッツェル王の求婚の使者としてブルゴント国に到着したとき、グンテル王はリュエデゲールに敬意を払うために自ら席を立ち上がった(1185, 4)程であり、そのあとクリエムヒルトがフン族の使者と対面したのもリュエデゲールがまさに「数多の徳を積んだ騎士」(1221, 3)だったからである。クリエムヒルト自身続けて「もしほかの人が使者として来たのなら、私は決して対面などしようとは思いません」(1221, 3-4)と語っている。美德の騎士リュエデゲールの誠実な誓い(1256-8)に心を動かされたクリエムヒルトがライン河を越えてフン族の国へ嫁いで行く長い旅の途上にあっても、リュエデゲールは宮廷的騎士の礼儀作法を心得ており、殊に彼の国ベッヒェラーレンでは優雅な出迎え(1305)のあといとも丁重に歓待した(1317)のみならず、一行がその地を去る際にも彼は臣下と共に真心から一行を護衛して行った(1331)程である。

このリュエデゲールの宮廷的な気前よい歓待の描写は、それから13年後クリエムヒルトから招待を受けたブルゴント族がフン族の国へ赴く際に再度展開される。リュエデゲールの国境を守っていたエッケワルトは、ブルゴント族がそこを通りかかったとき、リュエデゲールについて次のように誉め称えている。

《Der sitzt bî der strâze und ist der beste wirt,  
der ie kom ze hûse. sîn herze tugende birt,  
alsam der sûeze meie daz gras mit bluomen tuot.  
swenne er sol helden dienen, sô ist er vroelîch genuot.》  
(1639)

「あの方はこの街道筋に居を構えており、世に住む人のうちでも最も立派な城主です。彼の胸が徳性を育むことは、さながら快い五月が草木の花を育てるに似ており、武士たちの世話をすることがあの方には喜びなのです。」

この評に違<sup>たが</sup>うことなく、リュエデゲールはブルゴント族を丁重な挨拶でもって出迎えた(1656)。辺境伯夫人と息女も侍女たちを従えて城門の前まで出迎えた(1662)が、彼女らの麗しい衣裳からは宝石の光が遠くまで輝き、見るからに艶美な姿であった(1663)。客人たちはそこで貴婦人たちよりいとも懇ろな挨拶を受け(1664—6)、やがて広間へ案内され素晴らしい供応を受けた(1671)のである。さらに勇士たちの執り成しで結ばれた高貴なギーゼルヘルとリュエデゲールの息女との婚約(1679)がその場に光栄を添える。ともかく、リュエデゲールの回りには宮廷的な雰囲気漂っているものであり、客人たちが出立する際にも彼は気前よく引出物を贈ったばかりではなく、彼らを自らフン族の国へと案内したのである。13年を隔ててこのように詩人によって二度も艶やかに描かれたベッヒエラーレンの華やかさは、これから起ころうとする凄惨な戦闘と著しいコントラストを成している。ベッヒエラーレンでの場面が特別宮廷的な雰囲気を漂わせているのも決して偶然ではなく、そこには詩人の意図があり、作品全体のためにはまず宮廷的な描写を展開させる必要があったのである。

### 3. リュエデゲールの苦悩

このようにリュエデゲールは客人たちを優雅にもてなすことによって大変名誉を受けていると感じていた(1646; 1648)が、それだけに一方客人

たちを待ち受ける災いのことなどは予感だにしなかった。しかし、それを彼の落度だと咎められようか。そこには如何ともしがたい運命の力が支配しているのであり、今やその災いは宿命的に大きな雪崩となって崩れ始めたのである。

敵味方の悲惨な状況を見て嘆き悲しむリュエデゲールをフン族の一人が臆病者呼ばわりする(2138—40)と、名誉を傷つけられたリュエデゲールは怒ってそのフン族を殴り殺してしまう(2142)。この行為は彼にとって名誉(êre)が如何に彼の行動の原動力であるかを示している<sup>4)</sup>と言えよう。しかしまたこの名誉の観念が彼の運命の分かれ目でもある。彼はまさにこの名誉のためにブルゴント勢と戦うこともできない(2144)のである。彼らをフン族の国に案内したのはまさに彼であり、さらに彼らとは縁戚の関係まで結んだ間柄だからである。クリエムヒルトが彼にかつての誓いを思い出させ、それによって彼の名誉が危機に迫られると、彼は名誉(êre)と魂(sêle)とを区別する。彼にとって真のêreの根底にあるものはキリスト教的概念のsêleだからである。

«Daz ist âne lougen :        ich swuor iu, edel wîp,  
daz ich durch iuch wâgte        êre unde ouch den lîp.  
daz ich die sêle vliese,        des enhân ich niht gesworn.  
zuo dirre hôhgezîte        brâht' ich die fürsten wol geborn.»(2150)

「あなた様に名誉(êre)や生命をも捧げると

お誓い申し上げたことは否みは致しませぬ、気高いお妃様。

しかし魂(sêle)までも犠牲にするとは誓いませんでした。

私はあの生まれ貴い王様方をこの饗宴にお連れ申したのでございます。」

このように悩むリュエデゲールに対して、クリエムヒルトとエッツェル王が二人して彼の足もとに跪いて嘆願するに及んでは、リュエデゲールの嘆きは頂点に達するのである。

«Owê mir gotes armen,        daz ich dize gelebet hân.  
aller mîner êren        der muoz ich abe stân,  
triuwen unde zûhte,        der got an mir gebôt.  
owê got von himele,        daz michs niht wendet der tât! (2153)

Swelhez ich nu lâze        unt daz ander begân,  
sô hân ich bæslîche        unde vil übele getân :  
lâze aber ich si beide,        mich schiltet elliu diet.

nu ruoche mich bewîsen,            der mir ze lebene geriet.》(2154)

「ああ、このような目にあうとは、何と惨めな身であろう。

あらゆる名誉をなげうち、神に授けられた信義も礼節も

捨ててしまわねばならぬとは。天つ神も哀れとおぼせ。

死んでしまったらこうした目にもあうまいに。

一方を捨てて、他方を行なっても、私は悪いやつ、

怪しからぬ男と言われましょう。さりとて両方とも捨ててしまえば、

世の人みんなが私を罵るでしょう。

私に生命を与え給うたものよ、どうぞ教えを垂れて下さいまし。」

ここでリュエデゲールにとって悲劇であるのは、自分のこれまでの倫理的  
要求に従ってもはや生きてゆくことができないという点にある。もはやそ  
こからの逃げ道を見つけることもできないような状況に陥ったのである。

神に呼びかけても神は答えてくれない。まさにこの点に「ニーベルンゲン  
の歌」の特異性がある。ここにおいてニーベルンゲンの詩人は独自の文学  
的立場からリュエデゲールの内面的苦悩を創作しているのであり、それは  
例えば同時代のハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」<sup>5)</sup>の世界と  
は異なるのである。

《ich weiz wol, swederz ich kiuse,

daz ich an dem verliuse,

ich enmöht ir beider gepflegen,

ode beidiu lâzen under wegen,

ode doch daz eine :

...

ich bin, als ez mir nû stât,

gunêret ob ich rîte

und geschendet ob ich bîte.

nune mag ichs beidiu niht bestân

und getar doch ir dewederz lân.

nû gebe mir got guoten rât.》(4877-89)

「思うに、いずれを選んでも

私は破滅の身となる。

私は両方を成すことはできないし、

また両方を成さずにいることもできない。

できてせいぜい一方だけのこと。

...

私は、このままの状態なら、  
出かけても不名誉の身となるし、  
ここにいても恥辱を受ける。  
私は両方を克服することはできないし、  
さりとて両方を見捨てるわけにもゆかない。  
神よ、私によい教えを与え給え。」

イーヴァインとリュエデゲールとの間にこのようによく似た苦悩があることは興味深いことである。イーヴァインの懊悩は、要するに、二つの決闘を同時に果たすことのできない状況に追い込まれたことにある。その一つの戦いとは、イーヴァインの罪ゆえに死刑に処せられるという乙女ルネーテを助け出すための戦いであり、いま一つはある城主——その妻がイーヴァインの親友ガーヴァインの姉である——を助けるがための巨人ハルピーンとの決闘である。イーヴァインはこの二つの決闘の約束を名誉にかけて破るわけにはゆかない。ルネーテはその不安と苦悩をただイーヴァインの所為で受けている（4895—6）のであり、またその城主の妻の弟ガーヴァインには親友としての恩義がある（4903—10）からである。一方を捨てて他方を行なっても彼の名誉は破滅し、さりとて両方とも見捨ててしまえば、生涯恥辱を受け続けるであろうというイーヴァインの懊悩は、まさにリュエデゲールの場合と同じである。しかし、表面的に同じなのであって、本質的には異なる。イーヴァインの場合、巨人が時刻通り現われるならば、彼は二つの約束を果たすことができるのである。果たして神の恵みによってイーヴァインが待っていた巨人ハルピーンが現われ、イーヴァインの苦悩は取り除かれた（4914—5）。ハルトマンの「イーヴァイン」の場合にはこのように神による救いがある。しかし、「ニーベルンゲンの歌」の場合にはそのような神の救いは存在しない。リュエデゲールはわが身に痛手と苦悩（2156）とを招くことを知っていたので、できることならまず最初にエッツェル王とクリエムヒルトの願いを拒みたく思い、領土も城も返して、「もって生まれた足で、異国へさすらいの旅に出かけたい」（2157, 4）と申し出る。この決意は彼が領主としての騎士的生命を放棄して世間から離れてゆくことを意味しており、名誉の一つ「真心」（triuwe）を失ってこの場で死ぬくらいなら、全ての財を投げ捨てて別の世界へ入ってゆきたい（vgl. 写本C 2216）という限りにおいてキリスト教的な解決<sup>6)</sup>であるが、しかしその解決はリュエデゲールにとっては可能ではない。フン族の国王

夫妻が彼を自由にさせないどころか、ますます援助を願い出るのであり、詩人はこのリュエデゲールの苦悩の中に解かれえない人間の内的葛藤を見ているのである。この苦悩（2159—61）に対してクリエムヒルトが無慈悲な要求を続けたとき、リュエデゲールの決意も定まった。それは勿論絶望の決心であった。神の世界秩序へ順応することができない一人の騎士が今や死の破滅へと道を辿るのである。

#### 4. リュエデゲールの決心

それでは一体ニーベルンゲンの詩人はこのリュエデゲールの破滅的な決意の中に何を表現しようとしているのであろうか。

その決意に表面上最も強く働きかけたのはリュエデゲールのクリエムヒルトに対する真心からの誓言であるという限りにおいては、成程動機づけとして当時の宮廷文学の風潮であった「<sup>7)</sup>宮廷的婦人奉仕」が考えられよう。しかし、例えばペーター・ヴァプネウスキーが指摘しているように、<sup>8)</sup>リュエデゲールが戦いに出かけるとき、彼が持っていたのはエッツェル王とクリエムヒルトに対する封建臣下としての義務であって、求婚の使者の誓いと結びつきは弱いように思われる。なぜなら、ブルゴント族たちは、間接的ではあるが、リュエデゲールの決心を例外なく彼の封建臣下の義務から出たものとして理解している（vgl. 2173; 2231）からである。従って、リュエデゲールの決意の背景にはそのような封建臣下の義務が不文律として存在していたのではないか。エッツェル王のために戦うことは、封建臣下としての掟であり、彼はそれを封建臣下の運命として感じていた。リュエデゲールの行動と運命は一つだったのである。

このような宿命的なリュエデゲールの悲劇的状况においてニーベルンゲンの詩人が表現しようとしたことは、宮廷的騎士の中から如何にして英雄的な人間が生まれてくるかということである。この英雄的なものに関してここで大切なのは、英雄的なものは「ある」（sein）のではなく、「成る」（werden）ものであるということであって、それは初めから与えられているのではない。忠誠の板挟みに懊悩するリュエデゲールが真に英雄なのは、討死を望んで破滅の戦場へと向かうときからなのである。

er sprach : «ich muoz iu leisten, als ich gelobet hân.  
owê der mînen friunde, die ich ungerne bestân.» (2166, 3 — 4)

彼は言った。「私はお誓い申したことは果たさねばなりません。  
だが、自分の縁者と戦わねばならぬことは辛いのです。悲しいのです。」



ここにおいてリュエデゲールは「運命」との避けがたい対立に出会っているのである。「運命」とは避けることもできず、逆らっても無駄な、人間の力を超えた大きな暗い魔的な力であって、人間はただそれに服従するしかない。リュエデゲールはここでこの「運命」に身も魂も賭けることとなった(2166, 1)のである。

er sprach : «ir sult iuch wâfen,            alle mîne man.  
die küenen Burgonden            die muoz ich leider bestân.»  
(2167, 3 — 4)

彼は言った。「わが勇士の面々、みんな武装をととのえるのだ。  
わしは不本意ながら、ブルゴントの勇士たちと戦わねばならぬ。」

しかしこの瞬間リュエデゲールの内から「英雄的なもの」が生じたのであって、その運命に自ら突き進んで行って、如何にして英雄としての名誉を汚すことなく滅んでみせるかということが、リュエデゲールの課題なのである。今や彼はキリスト教的・騎士的ではなく、異教的・ゲルマン的に行動している。以前のキリスト教的騎士リュエデゲールが悩み嘆いていたのであり、今や戦いに突入してゆくのはゲルマン的英雄リュエデゲールなのである。詩人はこのように「騎士的なもの」と「英雄的なもの」とを同一視することができず、ここで自らの英雄的な立場を所謂「宮廷叙事詩」の根底にあるイデーに対立させたのである。その英雄的なものの本質は疑いもなく破滅であるが、その運命を感じ知るに至っても回避したりしないで、反対にそれに向かって突き進んでゆく英雄的な行動が詩人には少なくとも名誉あることのように思われたのである。

## 5. リュエデゲールの楯

しかし、そのリュエデゲールの破滅は単なるゲルマン的な死ではない。ハゲネがリュエデゲールに楯を願い出るという行為によって、破滅の直前に宮廷的な瞬間が認められるからである。ハゲネはリュエデゲールに対して „du“ で話しかけている。

«Daz des got von himele            geruochen wolde,  
daz ich schilt sô guoten            noch tragen solde,  
sô den du hâst vor hende,            vil edel Rüedegêr!  
so bedorfte ich in den stürmen            deheiner halsperge mêr.»  
(2195)

「いとも気高いリュエデゲール殿、天つ神の恵みによって、  
今おん身が手にしておられるような立派な楯を  
わしも持てるようになったら、どんなに嬉しかろう。  
そうすればわしは戦場でもはやいかなる鎧もつける必要はないのだが。」

この要求は単に物質的な武装のことを意味しているのではない。ハゲネが身を守ることでできる楯なら、回りに倒れた騎士たちの楯が沢山ある筈だからである。この象徴的な楯の願い出に対してリュエデゲールもハゲネに „du“ で答えている。

《Vil gerne ich dir wære guot mit mînem schilde,  
torst' ich dir in bieten vor Kriemhilde.  
doch nim du in hin, Hagene, unt trag' in an der hant.  
hey soldest du in füeren heim in der Burgonden lant!》 (2196)

「クリエムヒルト様に憚ることなく差しあげてよろしければ、  
わしは欣んでおん身にこの楯をご用立ていたすであろうが。  
いや、ハゲネ殿、これはおん身に差しあげる、持ってゆかれよ。  
願わくばブルゴントの国へこれを持ち帰られるように。」

これがリュエデゲール最後の贈物であり、その後彼はいかなる勇士にも物を贈ることはなくなった。ハゲネがどんなに傲岸冷酷な心さまの男であったにしても、殊勝な勇士が今や最期のときにのぞんで申しいでた贈物に接しては、さすがに深く心を動かされた (2198)。ハゲネは、リュエデゲールの楯を受け取ったあと、その贈物のゆえに自分は彼には攻撃をしかけないことを誓う。

《Nu lôn' ich iu der gâbe, vil edel Rüedegêr,  
swie halt gein iu gebâren dise recken hêr,  
daz nimmer iuch gerüeret in strîte hie mîn hant,  
ob ir si alle slüeget die von Burgonden lant.》 (2201)

「気高いリュエデゲール殿、これらの貴い勇士たちがおん身に対し  
どんな振舞いをしようとも、わしは引出物のお礼をしよう。  
それゆえおん身がブルゴント勢を皆殺しにされようと、  
この戦いでわしの手は決しておん身に触れはせぬ。」

残酷な殺害に物怖じ一つ見せなかった封建臣下の権化ハゲネが友としての誠を守るために自らの主君らの命をも惜しまぬことを誓言したこの態度は、リュエデゲールにその名誉 (êre) を回復させていると言える。最後

の生の瞬間においても限らない「徳性」(tugent)を証明して見せたリュエデゲールの死は、詩人も賛嘆しているように、誠に「あらゆる美德の父の死」(2202, 4)であったのである。自らの楯を贈与するという気高い心及びそのために剣を放棄するという高貴な心は、ハンス・ナウマンの指摘の如く、<sup>9)</sup>13世紀初頭の騎士的・キリスト教的基盤においてようやく成長した花なのであり、この楯の贈与の瞬間は全く宮廷的な瞬間であると言えよう。

しかし、背後に宿命的な死があるのはやはり異教的・ゲルマン的であり、もはやためらう気色はなく(2206)、客人たちに襲いかかって、勇敢にして誉れ高い武将たるに恥じない働きぶりを示した(2213)リュエデゲールの行動は、以前のハゲネ或いはイーリンクの行動と同じように、古代ゲルマンの英雄さながらの行為である。従って、以前ゲールノートに贈っていた剣によって倒れてしまったリュエデゲールの死は、宮廷的騎士の復活を待ち焦がれる甘い眠りではなく、反対に古代ゲルマンの英雄さながらの死なのである。「あらゆる美德の父の死」として詩人によって賛嘆されるリュエデゲールの「美德」(tugent)とは、従って、最後まで客人たちに真心を貫き通したという「徳性」のみならず、否それどころかむしろここで意味されているのは古い意味に属する「英雄的行為」(Heldntat)としての tugent<sup>10)</sup>なのである。

このようにリュエデゲールの死の中には異教的・ゲルマン的なものと宮廷的・騎士的なものとが素晴らしく融合しているのであり、この両方面からの tugent (徳) に支えられて彼は辛うじて *êre* (名誉) を救っているのである。しかし、その *êre* が結局は英雄的な死と結びついているというところにリュエデゲールの悲劇の特質があるのである。

## 6. おわりに

このように *êre* (名誉) はリュエデゲールにおいては決心の要であり、運命の分かれ目である。名誉を求めての行動と運命とは一つなのであり、彼は名誉のために生き、名誉のために死んでゆく。これに対して、例えば、ハルトマンの「イーヴァイン」は、宮廷的騎士に多くの苦悩を背負わせ、それによって勇士をためらわせ迷わせるのであるが、しかし最後には死を与えるのではなく、浄化させ新たな騎士生活を始めさせるのである。この点に両者の相違がある。つまり、リュエデゲールの世界を支配しているのは、「イーヴァイン」の世界のように全能の神ではなく、人間の

価値をことごとく破壊し、魔的な衝突を次々に積み重ねてゆく暗い運命の力なのである。

しかし、ニーベルンゲンの詩人は、その運命の壁にぶつかった宮廷的な騎士の中から如何にして異教的・ゲルマン的な英雄が生成するかを表現しようとしているのである。成程詩人には当時の所謂「宮廷叙事詩」の理想が魅惑的に映ったのであるが、しかし運命を回避するのではなく、反対にその滅亡の宿命に向かって突き進む英雄的な行動の方が少なくとも名誉あることのように思われたのである。言い換えれば、ニーベルンゲンの詩人は、例えばハルトマンの作品に見られるような神の恵みによるキリスト教的方法によってではなく、彼独自の方法、すなわち英雄的行為としての *tugent* と楯贈与に見られる *tugent* とを巧みに組み合わせることによってリュエデゲールの名誉 (*êre*) を救っているのである。しかし、その方法が結局は英雄的・悲劇的な死と結びついているところにリュエデゲールの悲劇の特質があるのであり、詩人は悲劇によって悲劇を克服したと言ってもよい。ニーベルンゲンの詩人が自ら自由に創作した宮廷的な人物の中に古代ゲルマンの思考と行動とを生き生きと表現させることによって、このように当時の諸作品とはその本質においてかなり異なった文学作品を創り出し、宮廷文学の中であってその独自の世界観を構築したということは、素材の枠外で成し遂げた詩人の偉大な業績であり、その詩人の文学的手腕を示すものだと言えよう。ニーベルンゲンの詩人は独自の自由なリュエデゲール創作の世界においても「英雄叙事詩」を見事にうたいあげたのである。 (1981・7・31)

※ 引用は ≫Helmut de Boor (hrsg.) : Das Nibelungenlied. F. A. Brockhaus 1972≪ に依り、その邦訳は相良守峯氏の訳 (岩波文庫) を引用・参照させて頂きました。

〔注〕

- 1) Vgl. Friedrich Maurer : Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954. S. 5.
- 2) 拙稿 : 「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」 (徳島大学教養部紀要—人文・社会科学—第15巻1980年) 265—6 頁参照のこと。
- 3) 相良守峯 : ドイツ中世叙事詩研究 (富士出版1948年, 郁文堂 1960年) 243 頁参照。

- 4) Vgl. Gottfried Weber : Das Nibelungenlied—Problem und Idee. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung. 1963. S. 101.
- 5) 引用は次のテキストに依る。G. F. Benecke und K. Lachmann (hrsg.) : Hartmann von Aue, Iwein. Band 1 Text. Walter de Gruyter & Co. 1968.
- 6) Vgl. Friedrich Maurer : Leid. Francke Verlag. 1969. S. 34.
- 7) Vgl. Hans Naumann : Rüdigers Tod. DtVjs. 10, 1932. S. 391.
- 8) Vgl. Peter Wapnewski : Rüdigers Schild — Zur 37. Aventure des Nibelungenliedes. Euphorion 54, 1960. S. 390.
- 9) Vgl. Hans Nauman : a. a. O. S. 399.
- 10) Vgl. Matthias Lexer : Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. S. Hirzel Verlag. (*tugent* = Männliche Tüchtigkeit, Kraft, Macht, Heldentat.) Vgl. auch Friedrich Maurer : Tugend und Ehre. Wirkendes Wort 2, 1951.

## Rüedegêrs Tragödie im *Nibelungenlied*

Eisaku ISHIKAWA

Rüedegêr, eine Erfindung des letzten Dichters, wird als hochsinniger Ehrenmann eingeführt. Die Vorstellung von *êre* ist die Grundlage und Bewegkraft seiner Handlungen, zugleich aber auch sein kritischer Punkt. Wegen seiner Ehrlichkeit gerät er in eine innerlich-tragische Situation (2153-4) ohne Ausweg. Der angerufene Gott antwortet nicht. Hier besteht ein Unterschied zwischen dem *Nibelungenlied* und Hartmanns *Iwein*. In Rüedegêrs Welt herrscht nämlich nicht der höfische Gott Hartmanns, sondern ein dämonische Konflikte auftürmendes Schicksal.

Der Dichter will m. E. hier dartun, wie der heroische Mensch aus dem Höfisch-Ritterlichen herauswächst. Wichtig ist dabei: Das Heroische ist nicht, sondern es wird. Das Heroische tritt bei Rüedegêr erst in dem Augenblick hervor, als er sich entschließt, *sêle unde lîp* (2166,1) zu wagen. Nunmehr handelt er nicht mehr als höfischer Ritter, sondern als germanischer Held. Das spezifisch heldische Beharren, dem Untergang nicht ausweichen zu wollen, sondern gegen das Verhängnis anzustürmen, scheint dem Dichter als ehrenvoll zu gelten. Die von ihm gerühmte *tugent* (2202, 4) Rüedegêrs bedeutet die germanische Heldenhaftigkeit.

Der darauf folgende Tod Rüedegêrs ist aber auf der anderen Seite höfisch gefärbt dadurch, daß er, *vater aller tugende* (2202, 4), noch im letzten Augenblick seines Lebens durch die Übergabe seines Schilds seine hochherzig-höfische *tugent* (2199, 4) beweist. Durch diese wunderbare Verschmelzung des germanischen Heldentums mit der höfischen Tugend rettet der Dichter Rüedegêrs *êre*. Das Wesen seiner Tragödie liegt darin, daß Rüedegêrs *êre* sich aber schließlich an den tragischen Tod knüpft.